

目指す学校像	自利利他円満～一人ひとりが幸せになる学校
重点目標	1 教科横断的な学びを実現する学力の育成と協働的な学びの場の形成 (STEAMS) <学力向上> 2 豊かな人間性とリーダーシップの育成 (Well-being) <教職員の資質向上・安心安全> 3 健やかな体と夢に向かって努力する心の育成 (Well-being) <学力向上・教職員の資質向上> 4 心に潤いをもたせる教育環境の整備と充実 (SDGs) <安心安全> 5 家庭・地域との連携と働き方改革の推進 (SDGs) <開かれた学校づくり>

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。  
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

学 校 自 己 評 価							学校運営協議会による評価	
年 度 目 標			年 度 評 価				実施日令和5年2月16日	
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等
1	<現状> ○令和2年度より「さいたま STEAMS 教育」の研究指定校として、国語科を中心に、教科横断的な学びの創造に取り組んでいる。 ○全国及び市の学習状況調査の結果から、全体的に学力は高いと言える。しかし、「出来るが好きではない」という傾向が見られる。 <課題> ○国語科で培った力を他教科でも活用して対話的で探究的な学びを実現するために、STEAMS TIMEでの国語の力の活用に取り組み、その結果を研究発表会を通じて広く市内の学校に公開して研鑽を深める。 ○学ぶことの楽しさを十分に味わわせ、学びに対する関心・意欲を高める必要がある。	・さいたま STEAMS 教育研究の総括と展開	①さいたま STEAMS 教育の研究発表会を開催し、授業公開・研究協議を行うことによって、校外からの意見を踏まえた改善を図る。 ②3年間の研究をまとめた研究紀要を作成して研究成果を周知し、市全体の研究に寄与する。	①授業公開・研究協議に50名以上の参加を得るとともに、参加者の意見を踏まえた新たな研究計画を作成できたか。 ②研究紀要を164校に配布し、紀要に対する「参考になった」の肯定的評価を80%以上得ることができたか。	①10月4日に実施した研究発表会には59名の参加を得た。令和5年度の研究計画書を作成し引き続き、教科横断的な視点に立った資質・能力の育成に取り組む準備を整えた ②3年間の研究をまとめた紀要を2月中旬に市内164校に送付する。評価は未定。発表会当日参加者の肯定的評価は98%。	B	<課題>市教育委員会より指定を受けた「教科横断的な視点に立った資質能力の育成」の研究を継続し、令和の日本型学校教育の具現化を図る。 <改善策>STEAMSTIMEについて、今年度の実践を踏まえ、一層体験的かつ協働的な内容に改善していく。	・研究授業公開、研究紀要の作成と日頃の授業充実に取り組む姿勢はすばらしい。今後も国語の大切さ、体を動かすことの大切さを追求してほしい。 ・話し合いながら協力して学ぶことができています。 ・授業の中に子ども同士がほめ・認めることを大切にしたい実践を行ってほしい。
		・学ぶ楽しさを実感できる協働的な学びの創出	①教え合い、学び合いの楽しさを味わわせるため、日常の学習活動の中に、話し合いの場を積極的に取り入れる。 ②ICTを活用し、小グループや学級全体で意見を共有したり協働したりする学習場面を設定する。 ③学校行事や校外学習の機会を使って協働的な体験を味わわせる。	①学校自己評価に係るアンケートで、話し合い学習が楽しいと回答する児童が、80%以上になったか。 ②学校自己評価に係るアンケートで、ICTを授業で効果的に活用したと回答する教員が80%以上になったか。 ③各行事や校外学習において、協働的な活動を1回以上設定できたか。	①様々な教科の学習で少人数による話し合い学習を取り入れた結果、81.9%の児童が肯定的な回答をした。 ②授業研究会を通して教員が互いに授業を参観する機会を設け、指導法の共有を進めた結果、肯定的回答が81.8%となった。 ③校外学習に当たり児童の実行委員会を組織するなど各1回以上実施した。	A	<課題>感染症対策の変更を見定め、これまで制約の多かった音楽、家庭科について、より一層体験的な学習活動を推進する。 <改善策>学校行事における協働的な活動と振り返りの時間を充実させる。話し合い活動の工夫により学び合いの力を向上させる。	
2	<現状> ○教職員の意識改革は十分とは言えないが、コロナ禍に対応するため教育活動を抜本的に見直す経験を重ね、過去にとらわれず本質を大切にしたい取組を企画する力もつけて来た。 <課題> ○新学習指導要領の3つの資質・能力を育成するための環境整備や指導法、GIGA スクール構想に対応するためのスキルや発想力を身につけるとともに、自ら学ぶ姿を示すことで児童の学びを引き出す新しいリーダーシップ、更には多様性を尊重し傾聴力を備えた教職員を目指す。	・児童一人ひとりに寄り添う、多様性の理解とカウンセリングの向上	①児童理解研修、ケース会議等、チームによる児童理解の機会を設定し、多面的な児童理解を進める ②SC、SSW等による専門的な助言や家庭との連携により多角的に児童の支援を図る。	①チームによる児童理解の機会を年間に15回以上開催したか。 ②教員がSC、SSW等との協議や家庭との連携のための話し合いを年間50回以上持つ事が出来たか。	①児童理解研修2回、ケース会議23回実施。専門家を招き共有したり保護者に寄り添い次に向けた話し合いを行ったりして児童理解を進め手立てを講じた。 ②SC、SSW 合わせて91回の協議や連携をもち、継続的な見守りを行った。	A	<課題>配慮の必要な児童へのチームによる支援体制を構築する。 <改善策>生徒指導提要改訂の趣旨を教職員が理解するための研修を実施する。SC、SSW との連携をさらに充実させる。	・配慮の必要な児童に寄り添い、心のケアを重視してよいと思う。 ・児童の多様性を踏まえた対応、とりわけよく聴くことに取り組んでいる。 ・ICTの活用が日頃の授業の中で実践できている。 ・今後、教科担任制の導入に向けて、研究・実践をしてほしい。
		・新学習指導要領に対応するためのICT活用能力の向上	①エバンジェリストによるICT活用のための研修会を開催して、学校全体のレベルを向上させる。 ②一人ひとりの教員がICT活用の課題を設定して実践し、学校全体の活用の幅を広げる。	①「よい授業」質問③の項目の全校平均が3.4以上になったか。 ②全ての教員が、新たなICT活用の授業実践を行う事が出来たか。	①エバンジェリストを中心に研修会を実施するなど活用方法の共有を図った結果、全校平均が3.4となった。 ②校内で共通課題を設定して取り組んだことで、全ての教員が、オクリンクやムーブノートを活用した授業実践を行った。	A	<課題>個別最適な学びに向けたICTの一層の活用を推進する。 <改善策>ドリル教材の効果的活用と学習履歴の利用に取り組む。CBTへの対応を踏まえ、教員の問題作成力を向上させる。	
3	<現状> ○「自分の力でより良い世の中を作っていきたい」という質問に70%の児童が「そう思う」と答えており、社会貢献への意欲は高い。一方、運動の機会が減少したことから、運動能力については低下傾向が見られる項目がある。 <課題> ○児童の得意分野を伸ばし自信を育てる指導を行い、自分の夢に向かって努力する心を養うとともに、努力を支える基盤となる一人ひとりの健康づくりにも積極的に取り組む。	・目標に向かって計画的に努力する、学びに向かう力の育成	①学級、学年等様々な機会を通じて、一人ひとりが目標を決め、実践し振り返る機会を繰り返し設定する。 ②教職員の連携により、児童の成長を複数の目で観察し、多面的に評価する。	①学校自己評価に係るアンケートで「より良い世の中を作っていきたい」と回答する児童が80%以上になったか。 ②教職員が連携する仕組みを3種類以上設定できたか。	①各学級で学期毎に一人一人が目標を設定する等の取組により90.7%の肯定的回答 ②児童理解に関する研修、学校運営協議会の提言を受けての取組、SDGsに関する取組など実践した。	A	<課題>自己肯定感を高め、自信をもって取り組める環境を整備する。 <改善策>児童が立案実行可能な企画を学年ごとに設定する。	・中学生、高校生との授業を取り入れる等、つながりを重視していく。 ・日常の学級生活の中でほめ・認める活動を取り入れ、豊かな心の育成を図りたい。 ・卒業した子のボランティア意識が高い。本校の児童育成の成果と言える。
		・進んで運動に取り組み自らの健康に関心を持つ意識の向上	①教科担任制の導入により体育の学習の充実を図るとともに、遊びなど日常的な運動の機会を増やす。 ②学校保健委員会等、健康に関して保護者との連携を図る取組を進める。	①学校自己評価に係るアンケートで「スポーツや運動が好き」と回答する児童が、85%以上になったか。 ②保護者との連携を深める取組を5つ以上実施できたか。	①休み時間の外遊びの奨励、「元気タイム」の全校での取組、体育授業の改善等により86.5%の肯定的回答。 ②学校保健委員会、8020 歯の健康教室、薬物乱用防止教室など4つの取組を行った。	B	<課題>運動の機会を増やしスポーツに進んで取り組む環境を整備する。 <改善策>教科担任制による体育の学習の充実と児童会活動による運動キャンペーン等の取組を行う。	
4	<現状> ○児童数の増加により空間的なゆとりを確保することが難しい。教室の床や昇降口等施設設備の老朽化も進んでいる。 ○食物アレルギー等、健康面への特段の配慮が必要な児童が年々増加している。 <課題> ○計画を基に、児童が安全で潤いのある学校生活を送ることが出来る施設設備の充実を図る。 ○安全に対する意識を向上させ事故を防止する。	・児童の心に潤いを与える教育環境の整備	①安全点検を定期的に実施して結果をもとに修繕等を実施するとともに、樹木等の管理を計画的に進める。 ②校舎内外の掲示物を計画的に更新して季節感や学びの楽しさを演出する。	①学校自己評価に係るアンケートで「美化。安全の指導に努めている」と回答する教職員が85%以上になったか。 ②掲示物の更新を、6か所で合計60回以上行うことができたか。	①安全点検に基づいた修繕を計画的に取り組むなど努力したが81.3%であった。 ②月ごと定期的な更新に加え、児童委員会活動による取組や正門掲示の改善など掲示物更新は60回以上	B	<課題>リフレッシュ工事を見据え計画的に施設設備の整備修繕を行う。 <改善策>他校のリフレッシュ工事の情報収集する。80周年に向けての優先項目を定める。	・校舎の老朽化、児童の増加に伴う特別教育の減少により、ゆとりある空間の必要性を感じる。 ・掲示物は常に創意工夫があり、教職員の取組に敬意を表したい。 ・学校が常に安全な体制が整うよう学校・家庭・地域が連絡体制を強化し、充実させていってほしい。
		・安全な生活の実現に向けた意識の向上	①健康観察、登下校指導等の日常的な安全指導を積み重ね児童の安全への意識を高める。 ②AED、エビペン、不審者対応等、安全に関する教職員研修を実施する。	①学校自己評価に係るアンケートで「健康や安全に気をつけている」と回答する児童が90%以上になったか。 ②安全に関する教職員研修を5回以上行うことができたか。	①けがマップの作成、日常的な安全指導の繰り返し等により93.0%の肯定的回答。 ②食物アレルギー対応、ASUKA モデル等5回以上の教職員研修を実施した。	A	<課題>けがや病気を予防するための安全意識の向上 <改善策>学校保健委員会による健康キャンペーン等の取組を行う	
5	<現状> ○学校運営協議会の実施に向けて熟議を積み上げてきた。家庭、地域、学校の代表が意見を交換する中で、本校の児童に育てたい力が明確になり、参加者も熟議を肯定的に捉え、学校づくりに積極的に関わろうとしてくれている。 <課題> ○昨年度の取組を生かし、熟議の願いに向けて、家庭、地域、学校がそれぞれの場で具体的に何を行うかを明らかにして取り組む。 ○教育活動を保護者や地域に公開し、児童の姿を見てもらう機会を増やす。	・目指す児童の姿を共有するための情報発信と教育活動の公開	①学校 Web ページに学校運営協議会の情報を発信するページを新設し、目指す児童の姿や協議内容を広く共有できるようにする。 ②感染症対策を工夫して、授業参観、運動会の公開を行う。	①学校自己評価に係るアンケートで「学校運営協議会の活動が分かる」と回答する保護者が70%以上になったか。 ②学校自己評価に係るアンケートで「教育活動を積極的に公開している」と回答する保護者が80%以上になったか。	①Web ページ、学校だより等で積極的に情報を発信し96.7%の肯定的回答。 ②2週に分散しての土曜参観、学年ごとに入替制で実施した運動会、体育館でのハッピースタートの会等感染症対策と公開の両立に努め94.5%の肯定的回答。	A	<課題>学校運営協議会の活動の更なる周知と学校・家庭・地域の協働を推進する。 <改善策>コミュニティ・スクールの周知方法について熟議を行い、学校・家庭・地域それぞれの視点で周知を行う。	・豊かな心を育てるため、学校運営協議会として、学校・家庭・地域が同じ方向(子どもをほめ・認める)で、周知徹底を図りたい。 ・北浦和フェスティバルは、地域との連携を深めるだけでなく、児童の発表の場となっているため、引き続き、豊かな心をはぐむ機会としていけるよう発信していきたい。
		・教職員のワークライフバランスと地域交流との両立	①北浦和フェスティバルを通じて、地域の青少年育成諸団体との相互理解と連携を進める。	①北浦和フェスティバル実施後のアンケートで「地域のことが今まで以上に分かった」と回答する教職員が80%以上になったか。	①土曜授業の午後で各団体との交流も行いやすくなったことにより「地域の人たちの温かさを感じた」などの感想もみられるなど、フェスティバル全体の満足度の肯定的評価が87.6%であった。	A	<課題>教職員のワークライフバランスを踏まえた地域との連携 <改善策>今年度の見直しをもとに、地域等主催行事への教職員の参加方法についての課題を把握する。	

